

山岡 次郎

(やまおか じろう)

＝福井が生んだ染織の元勳＝



嘉永3年9月、越前福井藩士の家に生まれる。文久3年江戸に出て英学修業、慶応元年より長崎で英学修業、慶応3年7月帰福し、藩校明道館で英学句読師、後に洋学教授方となる。

明治3年、東京の大学南校に移り、翌年福井藩推薦留学生として米国に派遣され、プリンストン大学、コロンビア大学等に就学、化学鉍山工学及び染色法を修める。

明治8年6月、帰国し直ちに文部省監督局に採用。

東京開成学校、次いで東京大学で化学を教える。明治14年4月に農商務省発足に伴い、農商務省御用掛を兼務する。

【主な事績】

東京大学教官時代に舎密関係の仲間とともに、「化学会」（現日本化学会）創立。東京大学理学部在籍のまま東京職工学校（後東京工業高等学校、現東京工業大学）校長事務取扱として学校設立に携わり、学科課程、学校規則を制定。また後に工業教育の第一人者となる手島精一とともに東京教育博物館の強化に努めた。



東京職工学校

明治18年4月の農商務省「繭・生糸・織物・陶器・漆器共進会」で農商務省技師として審査委員など主導的役割を果たす。また、染色技術の不十分さを指摘し、「大日本織物協会」を設立。

この後、織物や染物の技術向上に向けて「足利織物講習所」（現足利工業高校）、「桐生織物講習所」、「八王子織物染色講習所」（現八王子工業高校）などを地元の有力機業家達と次々に設立、指導にあたった。



足利織物講習所跡

東京に在って全国の織物産地を指導した山岡であるが、学会、官界、実業界と多岐にわたる豊富な人脈を有し、福井への羽二重導入や染色、精練技術の向上にも深く関わった。

彼が創設した大日本織物協会には全国の有力機業家が会員となり、名誉会員や終身会員には著名な学者、政治家も名を連ね、山岡の死後も日本の織物業界を指導した。

明治21年には官吏を退いて、日本を代表する織物買継商の佐羽商店の娘婿佐羽喜六とともに、明治期を代表する織物会社「日本織物会社」（本社東京、工場桐生）を創設し、工務長として入社し指導にあたる。

退社後は再び官吏に戻り、没するまで横浜税関鑑定官、大蔵省鑑定官として輸出織物の監査職として、輸出織物の欠点改善に努めるなど染織の振興に多大な功績を残した。

明治33年 フランスよりシュヴァリエ・ド・ロルドル ナショナル・ラ・レジョン・ドノール勲章受賞

明治37年 清国皇帝より第二等第三隻龍星受賞

明治38年2月21日没 従五位勲四等瑞褒章



晩年の山岡

◆【主な著書】

「初学染色法」（「木綿染の部」「絹染の部」「染料薬品」全三冊）

「染色集宝」

「印度貿易論」、「金属談義」、「満州事情」他



東京大学時代の山岡次郎（化学関係者記念写真）

中段右側二人目が山岡である。その隣（右端）が後に農商務省技師として明治20年代精練、染色指導のため何度か来福し、本県との関係も深い平賀義美である。平賀は絹織物同業組合三十五年史にも、高力直寛らとともに功労者として写真掲載されているが、なぜか年史本文には平賀に関する記載は無い。

中段左側二人目が高松豊吉である。後に東京大学教授ほか各界要職にあって日本の化学界、化学工業界の最高権威となる。山岡と親しく、山岡が織物振興のため私財を費消して没したため、遺児の生活のために奔走した。山岡亡き後の大日本織物協会にも運営面で支援した。



足利織物講習所開設当時の記念写真

前列中央が山岡次郎で、前列左端が足利機業界のリーダー、最長老として永く業界で活躍した川島長十郎である。川島は1937（昭和12）年90歳で天寿を全うするが、その死の直前まで、「足利に山岡を招請したのは自分だ」と誇っていたという。